The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	岡田新先生のご退職によせて
Author(s)	渡邉, 克昭
Citation	大阪大学英米研究. 2021, 45, p. 33-35
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99455
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

岡田新先生のご退職によせて

渡邉　克昭

現在、言語文化研究科研究科長をお務めの岡田新先生は、本学年度をもって、大阪大学を定年退職なさいます。先生の長年にわたる本学へのご功労、並びに英語専攻への多大なるご貢献に対し、心より感謝の念を表します。

先生は、1981年に大阪外国語大学の英語学科に助手として採用されてから、実に40年の長きにわたり、大学や英語専攻の運営に文字通り粉骨砕身、日々ご尽力いただきました。その働きぶりたるや、かつて「コンピューター付きブルドーザー」と渾名された宰相がいましたが、まさにそれに勝るとも劣らぬ的確な判断力と迅速な実行力のおかげで、今日の英語専攻があると言っても過言ではないでしょう。学内行政、教務、庶務、財務などあらゆる分野において細部に至るまで通暁しておられる先生は、いろいろな事案で相談をもちかけても、快刀乱麻のごとく処方箋を提示していただき、大いに助かったことは、英語専攻の教員であれば誰しも経験していることかと思います。頭の回転が抜群に早いうえ、能力のキャパが格段に大きい先生は、問題が深刻かつ複雑であればあるほど、かえって意気に感じて実力を遺憾無く発揮され、危機を脱したことが何度もありました。執行部として入試本部に陣取られ、思わぬ事態が起こっても、動じることなくテキパキと重大な決断を矢継ぎ早にされている姿が今でも脳裏に鮮やかに焼き付いています。そのような先生の溌剌とした輝ける姿を目にして、まさに大学教員を天職としてお生まれになったに違いないと、密かに納得したような次第です。とはいえ、今になって振り返って見るにつけ、何か事があると、われわれはついつい岡田先生を頼りにしていたようで、ご負担をかけ、まことに申し訳なく思う次第です。

そのように才知溢れる先生とは、不思議なことに、私の外大着任当初は、あまり深い交流がありませんでした。というのも、当時、英語専攻はⅠ部とⅡ部に別れており、人事も教学体制も全く別立てで、同一言語でありながら、あたかも別専攻のような様相を呈していました。やがて大学改革の波が押し寄せ、Ⅰ部とⅡ部の統合が求められることになったわけです。私の属していたⅠ部では慎重論が根強かったのですが、私は、Ⅱ部の先生方と協力して英語専攻を盛り立てていくことはまことに結構なことではないかと主張したため、Ⅰ部にもそんなことを言う人がいるということで岡田先生に認知してもらったような次第です。その後、学科改組、法人化、統合を経て、幾多の荒波に揉まれながら今日に至っているわけですが、節目節目の岡田先生のご見識が英語専攻の舵取りに大いに役立ってきたことは衆目の一致するところです。時には飲み屋で大いに議論を交わしたこともありますが、皆がそのような情熱を大学に注ぐことができたのも、岡田先生が英語専攻や教育にかける熱き思いがあったればこそで、今となってはセピア色の懐かしくも楽しい思い出です。

皆さんご承知の通り、岡田先生は、言語文化研究科研究科長としての重責に加えて、英語専攻の教育における功績もまた、まことに大きいものがあります。大阪外国語大学においては専攻語科目と副専攻語英語科目の整備、TOEIC 講座の開催等の企画、大阪大学との統合以降は、総合英語クラス、兼修語学英語クラスのコースの設計と運営、BULATS テストの導入、英語プレゼンテーションコンテスト、エッセイコンテストの導入、理系大学院生のための英語プレゼンテーション講座、コンテストの開催と、現在稼働している英語教育のプログラムのほとんどの立案、運営において主導的な役割を果たされ、本学における英語専攻のプレゼンスを高めるうえでも非常に大きな足跡を残されました。

このように多方面にわたって獅子奮迅の働きをされ、大学でのお仕事を生き甲斐にされてきた岡田先生は退職後、どうされるのだろうと少し気にかかっていたのですが、過日、講座代表会議の後、ご本人より名古屋外大に行く

ことになったとお伺いしました。やはり天はまだまだこの人に大学でさらなる使命をお与えなのだと思うと、すっと腑に落ちました。どうかお体を大切に、また新天地にて大いにご活躍ください。そういえば、先生のお名前は「新」でしたね。いつも颯爽と新たな気持ちで輝かしい未来に向かって、一緒にお仕事をさせていただいたことを、同僚としてとても誇らしく思います。大学で先生と過ごすことのできたかくも愉快で充実した時間は、決してわれわれ教員と学生たちの記憶から消えることはないでしょう。また、お目にかかる日を楽しみにしております。